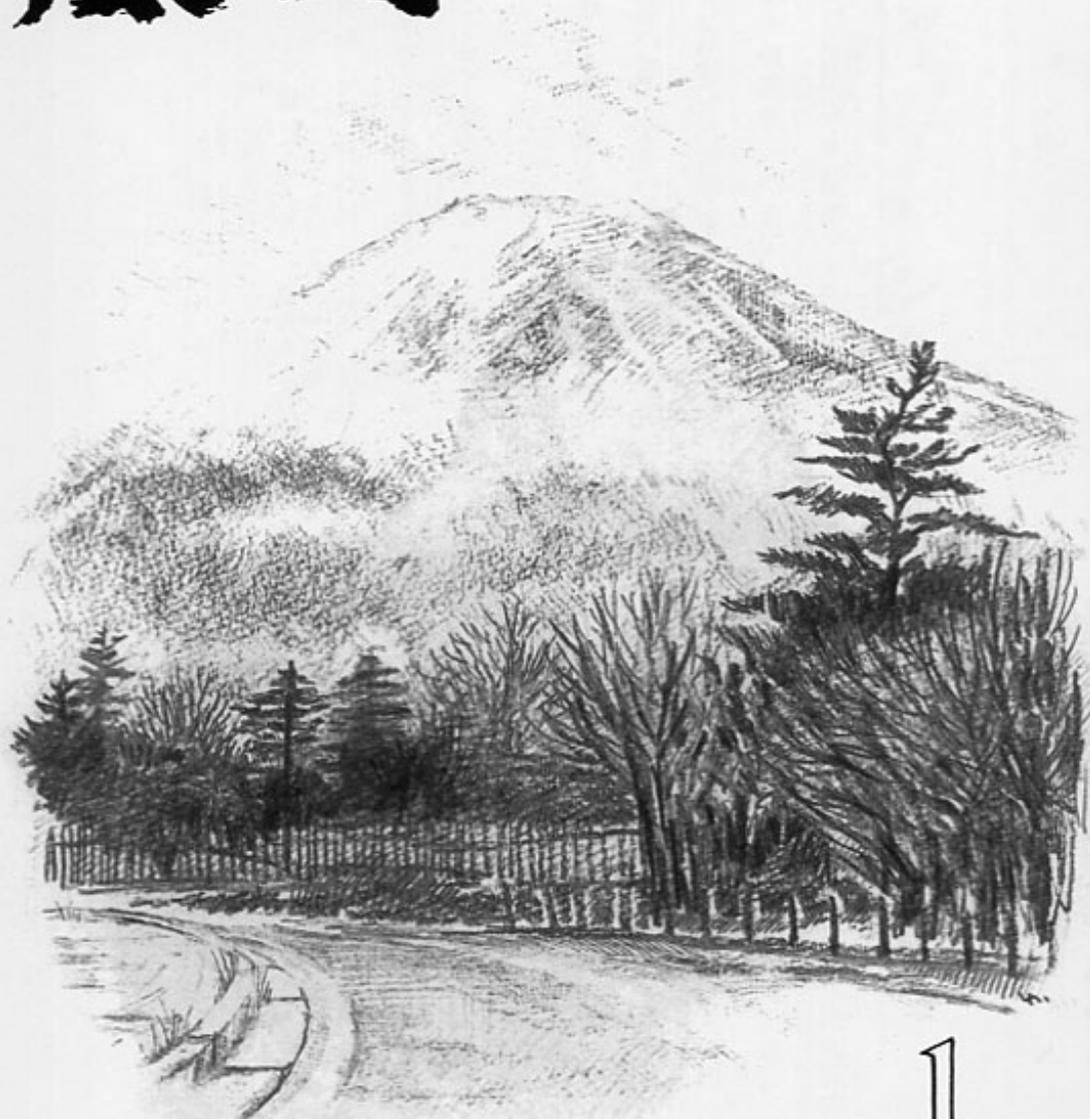


風土



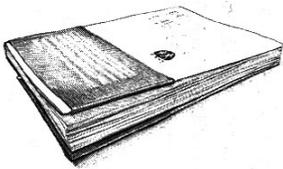
冬 暖 か
神 蔵
器

冬耕の兄が消ゆれば風ばかり
水音の要の石や冬暖か
身の丈に霜の花咲く竹箒
子規庵の今年の椿実を結ぶ
反故焚きてのこりし闇に牡丹焚く

あね呼べば兄が顔出し笹子鳴く
そのかみのドンの大砲冬桜
指先に測る酸素量鳥渡る

茶杓をいただく

やすみしし茶杓の銘の「菊づくり」
良寛の手鞠のそれて昼の月
東塔に西塔釣瓶落しかな
慶喜の大政奉還新松子



竹間集

同人作品



神還る 岩木茂

鳥渡る石のひとつが八百比丘尼
むかご飯猪が出さうな夜なりけり
今日蛇笏明日は素十忌露葎
茶の花や雪舟観の丘に佇つ
小魚が海月をつつく小六月
さはさはと潮の差し来る冬菜畑
橋立の青き廻廊神還る

小鳥 相沢有理子

屋上の宴さざめき秋澄みぬ
やはらかき濡れ縁の日に胡桃割る
魯山人の器また佳し茸飯
朝刊を取りに一驚穴まどひ
陶土練る双手の冷えに海鳴れる
川岸の屋台賑はふ文化の日
枝移る小鳥見飽かず桂郎忌

秋行く 小林輝子

翻へるたび色変ふる椋鳥の群
にびいろの沼に触れゆくとなめかな
蘆の秋手提袋に辞書重し
秋行くや樹々の全き影水に
秋寂ぶや沢風及ぶ露月の碑
本丸の址風掴@む雪迎へ
羽の国や霧ごめの暎の一つ紋

花 野

小野寺節子

名月の児童俳句にうさぎ跳ね
どんぐりが踏まれ泣くもの笑ふもの
散策の其処に彼処に草紅葉
トンネルを出ればまちまち秋の声
百里きて乗鞍紅葉五分三分
訪ぬるに吾は花野にご縁なし
目配りは四角三角紅葉狩

無 題

小林清之介

フアーブル忌蓑虫ぶらりぶらり哉
ベッドの辺まだ小蛾飛んで文化の日
最も巧し籠かごの懸巢けんそうの猫鳴きは
屑籠くずかごに投げて届きし柿の蒂
烏瓜剥うりかぼげて下がりて顔に似る
賢治忌けんじの静かな笑みを胸の奥
戸かどを練ねれば冬日燦きらめたり卒寿越そせゆ

小鳥来る

田村すゝむ

小鳥来る珈琲館で書く便り
奥の間に琴ねかせあり十三夜
はろばると良夜指定の荷の届く
鳥渡る停泊船は水を吐く
十月の白骨しろほねの湯に身を沈め
冷まじや閑所に残る土下座石
芒原引き返さねば出口なし

秋 澄 み て

瀬 戸 悠

萩括りけり何事も諦めず
消えさうな十月桜離宮跡
地袋に仕舞ふ剣山十三夜
天高く干しし馬草を裏返す
誤作動の火災報知器秋深む
秋澄みてわが身のうちも澄みにけり
夜焚火や赤松の幹てらてらと

波の貌

— 小野寺節子 —

物の音澄む親鸞ゆかりの誠照寺
佇みて秋思賜はる四足門
駈け出しの龍の眼光天高し
親鸞の声はいづこそ地虫鳴く
今日を生き「王山墳墓」の秋を知る
秋かもす五十四基の古墳帯
秋夕焼なごめる海の波の貌
行く秋の大海原のたたずまひ
日本海の喜怒哀樂を学ぶ秋
手庇の目路をよぎれる渡り鳥

山河集

同人作品



神蔵 器選

残りたる一本の松望の月

間島あきら

胡麻を干す筵を展ぐ峠口
鷓鴣る夕べの空を入れ替へて
月祀る机二つを縁に出し
刈りにけり次の風待つ蘆の丈

自家米の稲架掛け残る衣川

森屋慶基

粉殻焼く風の渦巻く衣川
北上川の風突き刺さる吊し柿
六日町七日町てふ穰かな
束稲山も北上川も月に浮く

澄む水を尾鱸一打ちして進む

中根 美保

霧吸ひて己が息として吐きぬ
青空を容れて十月桜かな

二の丸のいづれも大き榎櫃の実
閉ざしある百人番所木の実降る

二千戸の仙石原や花芒

下山田美江

雁渡しロープウエーは駅三つ
吾亦紅舟に差し掛く渡し板
一幅に青磁香炉や望の月
切先に止まるとんぼの上座かな

芒原しづかに刻のほどけゆく

池田光子

朝霧へ桃源台発ロープウエー
ひとところ熔岩に火のつく初紅葉
日をつれて関所の獄屋に穴惑ひ
遠くまで風先見える花野かな

風土賞作品

北窓

根岸善行

門松の切つ先風を揃へけり
初明り雲むらさきにくれなるに
土塊に濡れてをりけり春の雪
ゆりかへしゆりかへし虫穴を出づ
食卓に地震と卵冴返る
日当りへ蝶の時間の流れだす
てのひらに京の言葉と花菜漬
峽々に嶺々に汽笛や桐の花



光^{みひかり}天之池の湛へし五月かな
なかなかに一步が出でず墓
北窓に並べられたる西日かな
ネクタイを締めて涼しくなりにけり
三伏や「どん底」「ボルガ」隅の席
八月の空に入りたる奥穂高
星一つ転がり落とす芋の露
庭にある木は一本や小鳥来る
大空の奥なる運動会の声
蟻螂の登る梯子を上りけり
前方後円墳や冬の雁
転がりて空を余して冬の雷

新人賞作品

山神

上辻蒼人

初雪は総べて吉事や万葉歌
赤味帯び三輪の神杉寒明ける
甘櫨の丘冬將軍の又戻る
春の雲遊ばせ葛城古墳群
雑木山みな総立ちて斑雪
霾やタクラマカンの砂も降る
麓から咲き出し染井吉野かな
山神の化身うすずみ桜咲く



花冷えや青みて見ゆる盧舎那仏
二つ三つ並びて蚩袋かな
山壁に隠田二枚田水張る
深吉野の闇が養ふ山蚩
石を翔ち石に又来る塩蜻蛉
酷暑きて松影歪む石標
水打ちて打ちても火照る大地かな
誰が指揮大合唱の油蟬
秋の蝶三尺落ちて又舞へり
水分の神も旅立つ日和得て
峡の田や魯浅黄をまた深め
枯山の底に沼あり日の差せり

新人賞作品

南風吹く

雲所誠子

風 入 れ や 源 氏 絵 巻 の 母 の 帯
秋 立 つ や 仏 の 水 を 替 へ て よ り
岩 風 呂 に 入 り て 銀 河 を 溢 れ し む
名 月 や 踏 む た び 逃 げ て 影 法 師
潮 騒 に 触 る る 旅 愁 や 新 松 子
炉 火 燃 え て 築 百 年 の 木 の に ほ ひ
上 棟 の 手 締 一 本 鷹 舞 へ り
名 刹 を 抱 き 一 山 眠 り け り



あらたまの鳶の一笛初山河
紬織る箴のすべり音竜の玉
剝落の仁王聴きぬる初音かな
阿弥陀堂映して水の温みけり
老医師の逝きて無医村雲雀鳴く
春霞ひと山越えて郵便夫
群青の空が画布なり花こぶし
城の崎の外湯巡りや柳絮飛ぶ
分校の生徒九人すずめの子
寢室も馬屋も一家竹の秋
南門へ渡る睡蓮浄土かな
菩提寺は本尊一つ南風吹く

◇特別作品◇(抄)

秋惜しむ

高村令子

村中をゴツホの色に豊の秋
稲刈つて棚田田毎を日に晒す
鍵かけぬ農家の留守や小鳥来る
豊年や美作かつて一揆の地
高原の風の切れ味白芒
車捨て花野の花となりゆなく
八方へ野路の広がる萩の花
一郷を跨ぎて太し時雨虹
ときに火となる田仕舞のけむりかな
鐘楼に戻る鐘の音秋惜しむ

風土独語／神蔵器

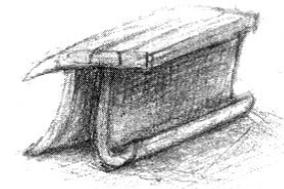


小鳥来る円周率の木のベンチ

生田恵美子

円周率は円周の直径に対する比率。 π （パイ）であらわされる。その値は三・一四一五二…と続くが、中学一年の頃で、普通三・一四ぐらいまでで計算された。

ベンチは待合室や駅、公園などに置かれ、数人が同時に腰掛けられる長椅子である。通常は後に背凭れがあり、椅子によつては両端に肘掛けというより仕切のようなものが付いているものもある。この点、 π 型のベンチには背凭れも、肘掛けもなく、腰掛けと確かに円周率の π の形に見える。ところで、ベンチの目的



は、申すまでもなく人が暫時腰掛けて休息するもので、 π 型のベンチもこの点は同様のようであるが、 π 型のベンチには背凭れのあるベンチとは本質的な違いがある。 π 型のベンチには腰掛けて休息をしても、上体は真つ直ぐ正し、目は閉じても全く眠ってしまうことはない。体自体が休まれば充分な酸素を得て心や脳は活性化され活発に働く。つまり π 型のベ

ンチは思索から瞑想のためのベンチと作者は位置づけているようだ。円周率の π も最近の電子計算機によれば小数点以下一万桁以上が計算されている。そしてまたリンデマンという人によつて π が超越無理数であることも証明されているという。科学の発展、文学の未来、そして五七五という最も短い俳句の行方も計り知れない。

尊氏の母堂が墓や芋の露

福田 周章

足利尊氏の母堂は上杉清子、父は上杉頼重である。足利貞氏の側室となり、嘉元三年（一三〇五年）尊氏を出生している。夫の貞氏の没後も足利家をよく支え、尊氏、直義兄弟が倒幕に動いた際には終始行動を共にし、室町幕府成立後は、実家である上杉家の興隆に力を用いた。和歌にも通じ、作品が『風雅集』に入選している。法号は果証院殿、墓は京都等持院にある。と百科事典にはあったが、作者の話では、母堂の墓は京都も綾部市から舞鶴線ほど近い安国寺にあるとのことである。おそらくこちらの方に本葬されているのではないかと思うが、はっきりしたことは解らない。

それにしても鎌倉時代後期から室町時代初期の激動期、武家の統領の家を支える側室としての女の生き方が、どれほど苛酷なものであったか、想像に余りあるが、今は芋の葉にかがやく金剛の美しい露の玉、少しの風にも右に左に走るあやうさのきらめきを見詰め、しのぶしかない。

風土集



神蔵器選

小鳥来る円周率の木のベンチ津山 生田恵美子

どの家にも底抜けの空柿吊るす
干瓢の黒き煮染や秋祭
草の絮畳みて敷布角立てり
一つ二つ三つ四つ**い**つばい木の実落つ

箱館鎌会 五句

高槻 浅田 光代

霧立てて三千年のカルデラ湖
出女の首筋にくる霧の粒
延命の玉子と秋を惜しみけり
青空のままに冷えゆく花芒
旅終はるりんごの耳を二つ置き
湿原に流るる霧におぼれけり
木道の右も左も花野かな
寿命七年延びるうはさや蚯蚓鳴く
おなもみのダーツ一投百点に

東京 林いづみ

乗り継ぎのケーブル谿の蔦かつら
言葉なき夫も吾が夫冬隣横浜 安永 圭子

朝さむや酸素マスクに伸ぶる髭
傾眠の夫の温顔十月尽
会ひに行く日課に枯野道となり
列をなし茶の花夫を迎へけり
胞衣塚を少しはなれて一位の実福生 雨宮 桂子

霧の香や立木のままの観世音
耳成山みみなるを起こさぬやうに鳥渡る
粉殻焼く一つ二つの山越えて
うしろより追はれてあたり秋の暮
松茸に突つ立つてゐる松の針〇〇 根岸 善行
一遍忌うす紫の雲一つ上尾
湖の日が傾きぬ雁渡し
よろよろと来し秋の蚊を打ち損ず
雨雲に青みが濡るる後の月